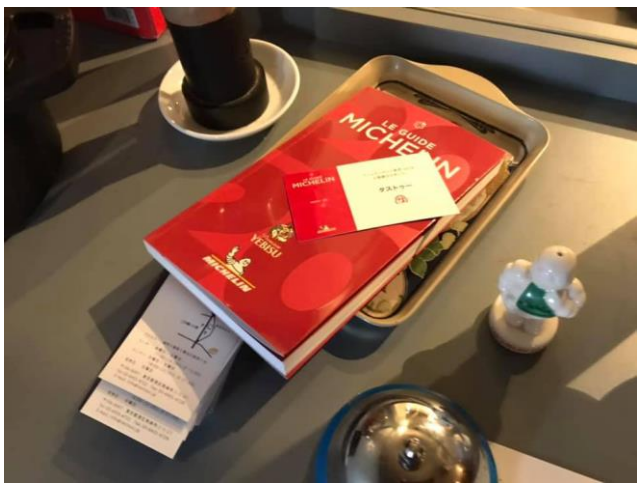
日常異変　コロナの私（6）

グローバル化への逆襲？

普段は 2 か月に 1 度のペースで海外出張をしていたが、海外渡航も半年近くない。コロナ禍の影響で海外出張も、米国ニューヨーク、イタリアのボローニャ、ドイツのベルリンなど、どれも感染の流行地だったのでお流れになった。

かといって今年の私の仕事は、国際的でなくなったかといえばそういうわけでもない。国際機関の会合には、徒歩 15 分のホテル、更に国際学会発表はオンラインと海外との仕事は続いている。なくなったものといえば、現地の皮膚感覚である。

海外に出かけることができない寂しさの一方で、現地で飲んだワインや食事などをミシュランガイド掲載店からテイクアウトで日常的にリーズナブルに食することができるようになった。バーチャルなグローバル感覚を身近なお店で味わう皮肉な日常である。



未来洞察の時代

私の本職は、技術予測などと呼ばれる未来を考え創るための仕事をしている。日本だと少し SF チックに見えるかもしれない。(実際未来洞察においては、SF はもっともクリエイティビティが求められるテクニックとされる。)

小難しい科学の専門家が未来を予測するといったイメージで、天気予報のように当たるか当たらないといった話になりがちである。もっとも、競馬新聞の当たり馬券予想かおみくじのように自分にとって利益にご託宣を欲しがったり、または好事家が悲観的な未来からお勉強をされたいといったようなまじめな話に付き合っていくものだから、当たらないとか当たったら当たったで、どうしてくれるんだといわれ、なかなか因果な商売ではある。

そもそも未来は決まっていないから未来なのであって、オープンなものである。自分で変えることができるというのがフューチャリストの流儀である。その意味で未来洞察とは、自分の望む方向にもっていくための危機管理のテクニックでもある。

ということで、コロナ後、with コロナの時代はニューノーマルとも呼ばれるようになったが、未来を考えていくことが、社会で重要なイシューになった。この意味では、私にとってはノーマルというか、ようやく自分らのノーマルが世界のノーマルに近づいてきたのかもしれない。

未来の展示：Exhibits of the future

筆者は昨年 10 月フランス・パリの OECD 本部において毎年開催されている Government Foresight Community 会合に参加し、主要国の政府機関で実施されている未来洞察の実務家との間で未来予測の手法と各国の事例について意見交換を行った。OECD-GFC は、世界中の公共部門の戦略的予測専門家を集める会合で、その目的は、コミュニティ全体の経験を活かし、現代の主要な政策問題に結びついた将来の未来洞察を組み合わせることにより、政府および国際機関の先見の明（何が起きるかについての予期）を強化すること目的としている。

そこで「未来の展示」というセッション、複数のもっともらしい未来の混乱とシナリオを探索するワークショップに参加した。 今日の政策に貢献するシグナル、影響、および潜在的な影響について議論してシナリオを作成した。 OECD グリア事務総長もこのセッションに参加し、GFC 参加者と交流したのだった。

ここで出されたイシューが、驚くべき程コロナ禍の現下の状況を予測するものだったので会員の皆様にシェアすることにしたい。

議論したシナリオについては、以下の１０であった。

１． 外出しなくなった世界になったとしたら？

⇒VR で快適なオンラインで「孤立」が実現するシナリオ

２． イタリアが 2022 年に EU を離脱したらどうなるか？

⇒EU の統治への不満はどうなるか

３．　極端に政治的意見が分極化した中での民主主義への信頼はどうなるのか？

４．　人口密集ではない世界になったとしたらどうなるか？

５．　グローバルなサプライチェーンがブロック経済化したらどうなるか？

⇒プロシューマーの存在や３Ｄプリンターで循環型経済が実現する可能性

６．　バーチャルな市場で最も大きな新興市場とは何か？

⇒メディアとプライバシーの問題が顕在化

７．　量子通信が実現したらどうなるか？再び暗黒時代となり光が復活する？⇒インテリジェンスネットワークの課題等

８．　世界変化の基本シナリオ

気候変動と地球環境の悪化によって引き起こされた広範な影響、複数の貿易戦争による経済の構造的かつ持続的な減速、世界の多くの地域におけるナショナリズムと保護主義の傾向、都市の人口過剰、多くの市民の生活の質の低下など、さまざまな要因が組み合わさって、人々は生活様式を根本的に変えざるを得なかった。

９．　もし途上国の自治体が、中央政府の役割を超えて、民間部門との戦いを主導して、気候変動との戦いの中心的な役割を果たすようになったらどうなるか？

「2030 パリ協定の約束の不履行。気温が 1.5 度上がった。LAC 地域は、年に 2 回の気候災害に直面している。農村の生計が危険にさらされているため、都市化は 96%に達した。各国政府が懸命に対応しようとする中で、地方の指導者たちは政治の構図を変え、都市は気候に優しい政策を推進しています。市長の影響力が強まり、政府は地方自治体に責任を委譲している。都市への公的資金の移転が進み、地方分権が進み、今後の中央政府の役割に疑問が生じている。地方自治体は、気候変動を止めるために必要な能力を構築するために、ビジネスリーダーと協力している。市長や熱心な市民たちが率先して、カーボン・フリーの都市を作ろうとする。」

１０．　もし政府機関が AI に攻撃されたら?

「政府サービスは使いやすいように開発されている。エクスペリエンスを向上させる主な目的は、サービスの自動化とシームレスな統合です。しかし、データを処理し、給付金やリベートの支払いなどの行動を起こす、相互接続性の高いシステムは、高度な AI 攻撃に対して脆弱である。世界最高の人材とソリューションへのアクセスを提供するパートナーの信頼されたエコシステムは、自動システムを高速で適応可能な操作から重大な金銭的損失から保護する方法で、人々、企業、取引の真の行動を自動的かつ個別に認識することで、将来的に政府サービスを保護することができるようになる。」

実現すること、しないこと

以上の 10 のシナリオ皆さんにはどう映っただろう？

もっとも実現から遠かったのは、その当時一番もてはやされていた 10 番の AI 人工知能の脅威だった。そもそも「政府サービスは使いやすいように開発されている。エクスペリエンスを向上させる主な目的は、サービスの自動化とシームレスな統合」という前段が満たされていなかったのである。

この結果、一人当たり 10 万円の現金給付など我が国では、オンラインで迅速な給付を中央政府がうたっている中で市町村の現場では大混乱のなかで職員は尽力中である。コロナ禍の中で確かにテレワークなどは実現した中で押印が必要な中で、出勤をやめられなかった人も多いだろう。即ち、AI が攻撃するにはハンコの壁は越えられなかったのである。

こうした危機は歴史に遡れば、大きな社会変革の後押し要因になってきた。100 年前のスペイン風邪も、第一次世界大戦で数多く登場した毒ガス、戦車、航空機などに比べて数多くの犠牲者をもたらしたのだった。

未来とは、そのようにイメージして望めばほぼそれに近い形で実現するものである。しかし、期待どおりの良い結末になるとは限らない。漫画のドラえもんの各回の結末のように少し不思議（SF）な感じになることが多い。

未来とは、不断の努力で、皆で共に築いていくものなのである。

ということで、みなさま、未来をこの研究会でともに考えていく機会を新たな形で実現していこうではありませんか？

白川展之